

使徒の働き16章11-40節 「欧州宣教の初穂」

1A リディアの一家 11-15

2A 看守の一家 16-40

1B 悪霊による宣伝 16-18

2B 偽りの告発 19-24

3B 地震による回心 25-34

4B ローマ市民としての抗議 35-40

本文

使徒の働き 16 章を開いてください。先週は、1 節から 10 節まで見ましたので、11 節から入ってきます。前回私たちは、パウロの一行がついにアジアからヨーロッパ、欧州への宣教に神が召されたのを見ました。トロアスにいた時に、パウロが幻の中で、マケドニアの人が助けに来てくださいと言うのを見ました。それで、パウロ自身、想定していなかった旅を始めます。主に召されるとはどのようなことか？時に、自分が望んでいることが止められることから始まるということがあります。

そして、ついに、船出をしますが、主はすばらしい魂の大収穫を与えると思うかもしれません。主が召されたのですから、そのはずだと思います。けれども、そうではありません。少ない数の人々と、多くの反対から始まります。しかし、その魂の救いが、いかに貴いものであるかを知ることになります。信じた者たちは、主に対して、非常に忠誠心の強い人々となっていくのです。

1A リディアの一家 11-15

¹¹ 私たちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。

トロアスから、サモトラケという島には 130 キロメートルもあります。そこからさらに、マケドニアの都市ピリピの玄関口の港にあたるネアポリスは、130 キロメートル以上の航行です。これを、「翌日」と言っていますから、たった二日間で渡り切ったということになります。主は、順風によって彼らを速やかにマケドニアのほうに連れて行かれました。

私たちが 2018 年に旅をした時は、トロイに近いホテルを朝に出て、バスでトルコからギリシアに越境し、次の日にネアポリスに到着し、そのホテルに宿泊しました。今は、カヴァラと呼ばれる港町です。ホテルは港の目の前にありましたから、パウロたちの船がここに着岸したのだと思い、感慨深くなりました。

私たちはトルコからギリシアに越境したのですが、彼らにとっては、同じローマ帝国内のアジア州

からマケドニア州に動いたに過ぎません。実に、イスラエルから福音が伝えられてきても、すべてがローマ帝国内にあったのです。今であれば、イスラエル、レバノン、トルコ、そしてギリシアに移動することになりますが、そこには敵対関係もありますし、イスラエルとレバノンの国境地域は、ヒズボラがいるので、非常に危険です。けれども、そういった心配は、同じ帝国内ですから、なに一つありませんでした。ダニエル書には、ローマは、おぞましい獣の姿で幻に現れ、事実、強権的、覇権的な帝国です。けれども、主はそういったことをも用いて、福音の働きを進められたのです。ですから、いろいろな困難があったけれども、パウロたちによる宣教は速やかに広がっていったのです。私たちが見れば、そういった悪を見て、怒ったり、落胆したりします。しかし、神の目には違います。政治や社会の状況が悪くなっても、神がその中で主権をもって働かれます。

¹² そこからピリピに行った。この町はマケドニアのこの地方の主要な町で、植民都市であった。私たちはこの町に数日滞在した。

ネアポリスからピリピへは、バスで 30 分ぐらいでした、15 キロあります。ネアポリスから急な上り坂でしたが、すぐに平原になります。そして、もう一つ、とても大事なローマ街道がありました。今でいう幹線道路です。エグナティア街道と言います。ネアポリスから出て、ギリシア半島の反対側、イタリアに面するアドリア海までまっすぐに東西に走っていました。「すべての道はローマに通ずる」という諺がありますが、今でも街道の跡が残っている程、地中深くから整備していた、しっかりした道路でした。こうした街道も、パウロたちの旅をすばやいものにしていました。

そして、ピリピの町についてです。この名前は、アレクサンドロス大王の父、マケドニア王国の王、ピリッポス二世から来ていて、この町を建てました。かねてから、金鉱が近くにあったので、金によって栄えた町でした。後に、紀元前 42 年、ローマの中での内戦がありました。ブルータスとカシウスが、アウントニウスとオクタウィアヌスと戦ったのです。前者が負けて、それでオクタウィアヌスがアウグストスになり、ローマ帝国が始まるのです。ピリピの人々は、誇り高きマケドニア人でしたが、ローマの支配下に入ってから、ローマに忠誠を尽くす人々となりました。それが、霊的にも大きな特徴となります。激しい反対にあいましたが、信じる者たちは、最後までパウロたちに忠誠を尽くす人々となっていくのです。

「植民都市」であったとあります。植民とありますから、ローマの民が植えられた都市ということですね。広大なローマ帝国で反乱などの騒乱が起こらないように、軍事上の拠点となるような都市を置きました。ローマの退役軍人が多く住みました。全員にローマ市民権が与えられ、免税の特権も与えられていました。ローマのモデル都市と言ってもよいでしょう。他にも、ピシディアのアンティオキア、リステラ、トロアスも、そしてこれから出てくるコリントも植民都市だったのですが、ピリピの町のみを、ルカは敢えて植民都市であることに言及しています。それは、これからのパウロの、ピリピにおける宣教に、植民都市であることに関係してくるからです。

また、ピリピは農業生産が多くあり、金鉱も近いのでそれでも豊かになっていました。通商も盛んです。有名な医学学校もあったそうです。そのような大きな都市、特別な都市ではありますが、宣教がそれだけ多くの人に伝えられたかという点、必ずしもそうでないことを次に見ます。

¹³ そして安息日に、私たちは町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。

パウロの一行は、ピリピに到着して数日を過ごしましたが、その間に、いろいろピリピの中を調べていったことでしょう。その中で、ユダヤ人の会堂、シナゴークがどこにあるのかも調べたに違いありません。彼らの宣教は、まずユダヤ人や、改宗者、神を敬う異邦人に伝えていたからです。ところが、シナゴークがありませんでした。「私たちは町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に」行った、とあります。「集まって来た女たちに話をした」と言っていますが、ユダヤ教の中で、シナゴークを建てるのは、町の中に最低十人の男性を必要としていたからです。女たちはいたけれども、男が十人も満たなかったことが分かります。それだけ、ユダヤ人の存在が少なかったのであり、ローマ色が強く、反ユダヤ、ユダヤ人に敵対的な雰囲気さえあったようです。

シナゴークが建てられない時に岸辺に集まるのは、水の洗いの儀式を行うからです。今も、ピリピの遺跡のすぐそばに、クレニデス川が流れています。そこに、ギリシア正教会の洗礼場があり、私たちもそこに行って、パウロの一行と女たちが集まったことに思いを馳せました。

「そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。」とありますが、ユダヤ教のラビは、教える時は腰を下ろします。イエス様も弟子たちに教えられる時に座って教えていましたね。そして、パウロは、パリサイ人であったけれども、イエス様と同じように女性を尊びました。パリサイ人は、自分が異邦人、奴隷、女でないことを感謝しますと祈ったぐらいですが、彼はそんなことをしませんでした。どんな人も、キリストがご自身の命を捨てるほどの尊い存在です。

¹⁴ リディアという名の女の人が聞いていた。ティアティラ市の紫布の商人で、神を敬う人であった。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。

リディアが主のことばに心を留めました。彼女が、神を敬う人でありましたが、「ティアティラ市の紫布の商人」とあります。ティアティラは、黙示録の七つの教会に出てくる町の一つです。染色業で有名な町であり、紫布は高級貴人が着るもので、裕福な商人だったでしょう。

そして、ここでルカは、彼女はパウロの語ることに心を留めたのですが、それは、「主は彼女の心を開く」ようにされたからだ、と言っています。ここに、信じるか信じないかには、心を開くかそうでないかには、神の主権があることがはっきりと分かります。他にも女性が複数名いたはずですが、その

中で、リディアだけが心を開いたのです。私たちは神の真理を語りますが、主が心を開かれるのです。私たちは、神のこの恵みに思いを寄せず、なぜ人が信じないのか？ということに目を留めがちです。それによって、福音をなるべく信じてもらうようにとして、自分のほうで福音の中身を分かり易くしようとするのです。これは間違いです。

¹⁵ そして、彼女とその家族の者たちがバプテスマを受けたとき、彼女は「私が主を信じる者だと思いでしたら、私の家に来てお泊まりください」と懇願し、無理やり私たちにそうさせた。

リディアが、ヨーロッパ、欧州における初穂となりました。バプテスマを受けましたが、その時に彼女の家族の者たちも受けました。後に回心する看守も、その一家がバプテスマを受けますね。世界の宣教において、個人だけでなく、その時に家族が回心すること、また部族全体が回心することがあります。それは、信じてもないのに、その共同体の長が信じたから、形だけでバプテスマを受けた、ということではありません。自分も同意して信じています。

そして、リディアの強い要望がすごいですね。「私が主を信じる者だと思いでしたら、私の家に来てお泊まりください」と言っています。ローマ社会には宿はありますが、お世辞にも快適な環境ではありませんでした。ですから、旅人はもてなす習慣があります。ここで断ったら、彼女を信じていない者と思っているということになってしまいます。彼女の強い求道の思い、信仰を持ったけれども、主をもっと知りたい、みことばを聞きたいという思いが反映しています。似たような話で、エマオへ行く途上で二人の弟子が、イエス様が聖書全体からキリストを説き明かしていた時に、無理やり自分と同じ所に泊まらせました。

エルサレムでは、マルコの母マリアの家が信者たちの集まる所で、祈る所となっていました。リディアがピリピに持っていた家も、ピリピにいる信者たちが集まる所、教会となっていくことが最後の部分を読むと分かります。

2A 看守の一家 16-40

1B 悪霊による宣伝 16-18

¹⁶ さて、祈り場に行く途中のことであった。私たちは占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させていた。¹⁷ 彼女はパウロや私たちの後について来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えていきます」と叫び続けた。¹⁸ 何日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り向いてその霊に、「イエス・キリストの名によっておまえに命じる。この女から出て行け」と言った。すると、ただちに霊は出て行った。

パウロ、シラス、テモテ、ルカなどの一行は、続けて祈り場に通っていました。その時に、「占いの

霊につかれた若い女奴隷」と言っています。ローマの多くの住民は奴隷でしたが、彼女は金もうけのために使われていました。そして、「占いの霊につかれた」とあります。パウロたちがどういう人物か言い当てているので、インチキの占いとは違い、悪霊によって語っていることが明らかです。イエス様がガリラヤで宣教を行われていた時に、悪霊が「神の子」とイエス様を呼んで叫んだことを思い出してください。悪霊は、霊の世界をある程度知っていますから、本当のことを語るができるのです。

具体的には、「占いの霊」というのは、「ピュートーン πύθων の霊」です。ギリシアには、有名な、デルフォイのアポロン神殿があります。デルフォイの神託で有名です。王や将軍が戦争に勝つかどうか、伺いを立てたり、健康問題、投資などでも伺いを立てます。巫女が、恍惚状態になって神託を語るのです。ピュートーンはギリシア神話では蛇と考えられていました。その霊につかれていて、これは現実に存在していて、占いをすることで主人は利益を得ていたのです。

悪霊は、パウロたちのことを宣伝しているように語っていますが、そしてそのことは間違っていないのですが、悪霊からの宣伝は、宣教の妨げにしかすぎません。それで、以前、キプロスで魔術師に対して対峙したように、ここでも対峙して、「イエス・キリストの名によっておまえに命じる。この女から出て行け」と言って、追い出しました。主が数々の悪霊を追い出されましたが、この方の御名によって追い出したのです。神は裕福な女を救われましたが、ここでは奴隷の女を救われたのです。キリストにあって、奴隷も自由人も一つです。

2B 偽りの告発 19-24

そして、イエス様がレギオンを追い出された時のことを思い出してください。主は、そうやって悪霊の力から男を解放され、福音をもたらされましたが、そこに人々は豚が水に沈んだことにより、経済的な利益を失い、恐ろしくなって追い出しました。同じことがパウロたちに起こります。

¹⁹ 彼女の主人たちは、金儲けする望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕らえ、広場の役人たちのところに引き立てて行った。

午前礼拝でお話したように、広場とはアゴラとも呼ばれるところで、行政的な手続きをとるアゴラもあれば、商店が多く立ち並ぶ広場もあります。ピリポは、商業的な広場であり、かつ裁き司の裁判席、ビーマと呼ばれますが、それが広場の前にありました。今もその跡が残っています。そのすぐ後ろには、エグナティア街道が走っており、人々が行き交います。まさか、こんな目立つところでパウロとシラスが、むち打ちの辱めを受けたとは思いませんでした。イエス様が、大通りに面するゴルゴタで十字架に磔にされたという辱めに似ています。

²⁰ そして、二人を長官たちの前に引き出して言った。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をか

き乱し、²¹ ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」

経済的な損失が主人の怒りでしたが、そんなことを訴えても、ローマ法と秩序を重んじる長官たちに聞いてもらえません。それで、「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し」と言っています。ユダヤ人が、ローマ人のもっている多神教の宗教、また習慣を変えようとしている、異邦人をユダヤ教に改宗しようとしているという訴えです。植民都市ピリピにおいて、誇り高きローマの宗教や慣習に挑みかかっていると訴えています。

また、ここにはユダヤ人への偏見もあるとうかがえます。ユダヤ人が少ないし、反ユダヤ感情も強かったのでしょう。パウロたちは、これまでユダヤ人たちから反対を受け、迫害を受けましたが、ピリピの人たちはそんな区別をせず、彼らをユダヤ人として迫害したのです。コリントにおいても、アキラとプリスキラがローマからコリントにやってきたのは、皇帝クラウディスが、ローマからユダヤ人を退去させるように命じていたからです(18:2)。

²² 群衆も二人に反対して立ったので、長官たちは、彼らの衣をはぎ取ってむちで打つように命じた。
²³ そして何度もむちで打たせてから二人を牢に入れ、看守に厳重に見張るように命じた。²⁴ この命令を受けた看守は、二人を奥の牢に入れ、足には木の足かせをはめた。

長官たちは、かつて総督ピラトが犯した過ちを犯しました。群衆の圧力に押されて、正しい裁判をせずに、そのままむち打ちにしました。どれほど酷いものであったかは明らかではありませんが、パウロは、宣教の働きの中で3度、むち打ちを経験しています(Ⅱコリ 11:25)。そして、厳重な監視の中に置きます。奥の牢とありますから、窓もありません。しかも、足枷をはめています。最悪の状況です。どれだけの辱めで苦しみであったか、次の宣教の町、テサロニケ人の人たちにも話しました。「Ⅰテサ 2:2 それどころか、ご存じのように、私たちは先にピリピで苦しみにあい、辱めを受けていたのですが、私たちの神によって勇気づけられて、激しい苦闘のうちにも神の福音をあなたに語りました。」

3B 地震による回心 25-34

²⁵ 真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。

午前礼拝で話しました、苦しみの中で祈り、そして賛美することの必要性について話しました。真夜中だとありますが、霊的にも暗闇の力が襲っています。けれども、主が戦ってくださいます。そして、この祈りながら賛美しているのを、囚人たちは聞き入っていました。証しになっていました。

²⁶すると突然、大きな地震が起こり、牢獄の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、すべての囚人の鎖が外れてしまった。

聖書の中では数多く、神が動いておられる時に大地震が起こっています。神が裁きを行われる時に地震が起こり、また、イエス様が十字架に付けられ、死なれる時にも地震が、復活される時も地震が起こります。このことによって、主なる神が聖なる方で、畏れ多き方なのだとすることを顕現しているのです。

²⁷目を覚ました看守は、牢の扉が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。

以前、ヘロデ・アグリッパ一世がペテロを捕らえて、牢に入れたけれども、御使いが来て、ペテロが出て行った後に、監視していた兵士たちが殺されました。ローマの掟に、監視している看守が囚人を逃した場合、その囚人に課せられた刑と同等の罰が与えられます。ですから、看守は、自分が殺されることは必至である、死ぬしかないと思ったのでしょう。

²⁸パウロは大声で「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫んだ。²⁹看守は明かりを求めてから、牢の中に駆け込み、震えながらパウロとシラスの前にひれ伏した。

パウロとシラスは、祈りと賛美によって囚人の心をすでに神の方に引き寄せていました。信頼を勝ち得ていたのでしょう。そして、この大きな地震が起こっても、囚人は逃げなかったのです！これはすごいことです。それから、看守は、震えながらひれ伏していますが、ここでは、さらなる恐れが出て来たのです。囚人たちが来て自分を襲うであるとか、そういうことをしたらまだ普通ですが、そこに鎖の解かれた囚人たちがいるのですから、もっと恐ろしいのです。神の恵みというのは、このように恐ろしいまでの神の聖さを感じさせるものなのです。

³⁰そして二人を外に連れ出して、「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。

看守は、他の囚人たちには聞かれないところに行き、個人的に二人に尋ねました。自分には「救い」が必要であると感じたのです。この時に、看守にはユダヤ人の聖書の知識はほとんどなかったと言ってよいでしょう。けれども、自分に救いが必要だと思ったのです。知的な理解で、「いかに救われることができるのか？」という問いではなく、地震など、一連の出来事を通して、神の聖なる姿を感じ取り、救いが必要だと思ったのです。十字架の場において、最後まで見届けたローマの百人隊長もそうでしたね、「この方は本当に神の子であった。(マルコ 15:39)」百人隊長は、ユダヤ人の理解している「神の子」を使っているのではないでしょう。もしかしたら、ローマ人の考

える、皇帝に使っていた「神の子」を思っていたかもしれません。それであっても、一連の姿、大地震が起こり、空が真っ暗になり、イエス様が十字架の上で正しさと聖さ、威厳を保っておられて、息を引き取られる姿を見て、心動かされたのです。

私たちキリスト者は、どうしても、理屈で人々に福音を知ってもらおうとして、こうした、神の力の現れを忘れてしまいがちです。しかし、言葉で語らずとも、その言葉を裏打ちする神の力、私たちに働かれる聖霊の力が、人々の心を動かします。

³¹ 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」³² そして、彼と彼の家にいる者全員に、主のことばを語った。

二人は端的に、救われるためにしなければならないことを伝えました、「主イエスを信じなさい」であります。ただ、主イエスを信じなさいと言って、そのまま信仰告白に導いたものではありません。主のことばを語り、それで看守は信じたのです。ただ、口で告白させればよいのだとして、信仰告白を引き出すようなことをする人たちがいますが、間違っています。主のことばを語り、それを聞いて信じるのです。

パウロとシラスは、看守だけでなく、家族も救われると言いました。ここで大事なのは、彼だけでなく、家にいる者たち全員に主のことばを語ったのです。主のことばを一緒に聞いて、それで信じて救われたのです。この言葉はしばしば、日本において起こっていますが、「信じないで死んだ人々」も、自分が信じているから救われるのだと希望を持たせる箇所として受け止められることです。そうではありません。リディアの回心の時も話しましたが、家族の人たちも一人一人が主のことばを聞いて、それで信じているのです。つまり、主イエスを自分自身が信じれば、その信仰によって、家族の人たちも主の証しを見て、また、主のことばを聞く機会にあずかり、それで救われるかもしれない、ということなのです。

³³ 看守はその夜、時を移さず二人を引き取り、打ち傷を洗った。そして、彼とその家の者全員が、すぐにバプテスマを受けた。

看守が形式的にバプテスマを受けたのではなく、真実に回心したことがここから分かります。打ち傷を洗っています。それまでは、むち打たれた背中はそのままだにされていたのです。けれども、二人の手当てをしています。それから、バプテスマを受けています。信じたら、バプテスマを受けます。多くの人がバプテスマを受けるためには、自分がきちんとしたクリスチャンになってからとっていますが、いいえ、信じるとは、本気に信じることであり、本気で信じることを体で示すのがバプテスマです。

³⁴ それから二人を家に案内して、食事のもてなしをし、神を信じたことを全家族とともに心から喜んだ。

素晴らしいですね、共に食事をしています。そして、神を信じたことを全家族とともに心から喜んでいます。リディアとその家族、そしておそらくは占いの霊から解放された女奴隷、それから、看守の一家です。これだけ、と言ったら失礼ですが、これだけだったのです。

しかし、この数少ない信者たちから、ピリピ人への手紙を見たら、素晴らしいことが書かれています。パウロがここに来てかなり経っていて、パウロがローマで牢獄にいたのですが、パウロのことを思い出して、何度となく献金を彼に送っていたのです。彼らは、人数は少なかったのですが、とても忠実な、忠誠心の強い信者さんたちだったのです。これは日本の宣教、東京における宣教でも同じことが言えます。反対の力が強い国です。けれども、一度、イエス様を信じたら、この方に最後まで仕えて行こうとする人々の間で、神の働きが成し遂げられてきます。

4B ローマ市民としての抗議 35-40

³⁵ 夜が明けると、長官たちは警吏たちを遣わして、「あの者たちを釈放せよ」と言った。³⁶ そこで、看守はこのことばをパウロに伝えて、「長官たちが、あなたがたを釈放するようと、使いをよこしました。さあ牢を出て、安心してお行きください」と言った。

看守は、良かったと思ったことでしょう。すぐにパウロに長官たちの言葉を告げに行きました。

³⁷ しかし、パウロは警吏たちに言った。「長官たちは、ローマ市民である私たちを、有罪判決を受けていないのに公衆の前でむち打ち、牢に入れました。それなのに、今ひそかに私たちを去らせるのですか。それはいけない。彼ら自身が来て、私たちを外に出すべきです。」³⁸ 警吏たちは、このことばを長官たちに報告した。すると長官たちは、二人がローマ市民であると聞いて恐れ、³⁹ 自分たちで出向いて来て、二人をなだめた。そして牢から外に出し、町から立ち去るように頼んだ。

ここは、注目に値するパウロの行動です。パウロとシラスは、ローマ市民でした。ピリピの町は植民都市で、すべてがローマ市民でしたが、ローマ市民が同じローマ市民を、公衆の面前で鞭打ったのです。そして、これはローマ法に明確に違反することです。裁判を受けて有罪判決を受けていて、初めて受けるむち打ちと投獄を行ったのですから。それで、長官たちは恐れました。そして二人を宥めました。もしこれが上に伝わったら、自分たちの立場も危うくなりますから。そして、二人はいてほしくない存在なので、立ち去ってくださいと頼んでいます。あのレギオンを追い出されたイエス様に対して、ここから出て行ってくれと頼んだ時に似ていますね。

パウロは、いわゆる権利を振りかざす活動家のように、ローマ市民としての権利を主張したので

はありません。あくまでも宣教のためであり、ピリピにいる兄弟姉妹たちのためです。ただでさえ、ユダヤ人の宗教と思われて、迫害を受けるのですから、自分が去った後で彼らが困難に陥ることのないように、彼らを守るためにローマ市民であることを訴えたのです。そうすれば、残された信者に手出しができなくなります。ピリピ人への手紙を見ると、それでも反対する力は強かったようですが、それでもそれは助けにはなったことでしょう。

私たちに与えられている権利は、必要な時に使っていいのです。特に福音のため、教会のため、他の人々のためであれば、その権利を行使することは良いことであります。私たちは、敬虔に生きようとするれば必ず迫害を受けるのですが、敢えて迫害を受けるように仕向ける必要はなく、避けられるものであるならば避けていく必要もあります。

⁴⁰ 牢を出た二人はリディアの家に行った。そして兄弟たちに会い、彼らを励ましてから立ち去った。

リディアの家は、かなり大きかったのでしょう。兄弟たちの集まる場所、教会となっていました。そこで励まし、立ち去ります。来週 17 章を見てきますが、そこでは主語が「私たち」ではなく、「彼ら」となっています。つまり、ルカはピリピに留まっていたことが分かります。パウロたちが第二次宣教旅行を終えて、第三次宣教旅行を始めて、エルサレムに行くことを考えてマケドニアを通過していた時に、20 章 5-6 節ですが、「トロアスで私たちが待っていた。私たちは、種なしパンの祭りの後にピリピから船出して、五日のうちに、トロアスにいる彼らのところに行き」とあります。かなり長い期間、ルカなどの働き人がピリピに留まっていたことが分かります。

そして、ピリピ人への手紙ですが、そこには、植民都市らしい言葉がちりばめられています。1 章 27 節に、「ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい」とありますが、直訳は「御国の市民として生活しなさい」であります。忠誠心の強いピリピの人々へ、ローマへの忠誠心が強かったのです。あなたがたは御国に対して忠誠心のある市民として生きなさいと励ましているのです。それから、「1:27b-28a 心を一つにしてともに戦っていて、どんなことがあっても、反対者たちに脅かされることはない」とも言っています。ローマ兵たちが一隊を編成して、敵に対峙して戦っている姿です。退役軍人の多い町にふさわしい表現です。それから、「ピリピ 3:20 しかし、私たちの国籍は天にあります。」とあります。ローマ市民としての国籍に誇りを持っていた人たちですが、私たちの国籍は天にある、と言ったのです。

私たちも同じように、御国の市民として忠誠心の強い、天に国籍のあることを誇る、高貴な市民、福音の戦士となっていきましょう。